

記憶の中の、白い一筋の一点景として残るのみである。

なお、終生忘れ得ぬ一事を加えるなら、終戦時、延吉の第三軍司令部参謀部にあつて情報に勤務していた私が、八月十八日、池谷参謀長に同行して、汪清におけるソ軍二五軍司令官チュシチャコフ大将との停戦協定に同席した時のことである。

モスクワの日本大使館付武官もされてロシア語の堪能な池谷参謀長の対話の始終は、全くチンプンカンプンで理解出来なかつたが、末席にあつて唯々汗を流す緊張の一刻であつた。

私は昭和二十二年十一月函館に帰還復員したが、池谷参謀長が三十一年、お元気で舞鶴に帰還されたのは無上の喜びであつた。

黒パン生活を偲んで

石川県 藤澤栄次

昭和十八年九月、戦局激化に伴う繰り上げ卒業によ

り学窓を巣立った。既に就職が決定していた日本銀行管理局に十月の一月間のみ勤務し、十一月一日、現役兵として福井県鯖江の中部第八〇部隊（歩兵第三十六連隊）に入隊した。二十日間の基礎教育の後渡満し、東安省密山に駐屯の満州第三一〇八部隊（満州独立第十五迫撃砲大隊）に転じた。

第一期の初年兵教育終了後に幹部候補生を志願し、数次の選抜試験を経て念願の経理部甲種幹部候補生として、新京陸軍経理学校（満州第八一五部隊・第八期生）へ入校した。

短期間ではあつたが猛烈を極めた教育に耐えて、昭和十九年十一月末卒業し、晴れて経理部見習士官となり、再び満州東北地方国境地の部隊に赴任し、北辺の警備に若き日の情熱を傾注していた。

運命の日、昭和二十年八月九日は、林口の満州第三百三十五師団挺身大隊の主計として勤務していた時に迎えたのである。

ソ連軍の突然の進攻に対し、部隊は直ちに牡丹江東方の愛河に転じて迎撃態勢に入った。間もなく十二日

夕刻よりソ連戦車が視界内に進攻し、更に間断なきソ連戦闘機の機銃掃射を受けて、一時は死を覚悟して応戦に努めた。しかし、大量の兵器・人員を南方戦線や本土決戦のため転出した後の劣勢兵力では、到底衆寡敵せず、遂に八月十九日に横道河子において屈辱の武装解除を受けた。

炎天下の強行軍により移動した拉古^{ラコ}収容所で一千人ごとの大隊に編成され、「ウラジオ経由で日本へ送還する」との妄言を信じて、九月一日貨物列車で拉古駅を出発した。ところが四日後に下車させられたのはソ連沿海州地方のリユサザヴォーツク駅であり、全員の落胆ぶりは言うまでもなかった。その後連日徒歩行軍を強いられ、漸く九月九日に目的地のシマコフカ駅西南方ヒョードルフカに着いた。

この間数回逃亡者が出たが、その始どが射殺された。このヒョードルフカを基地として、約一年半の間周辺を転々としながら、草刈りとその圧搾作業に従事させられた。(この間、昭和二十一年一月一日に第五五四作業大隊と改称され、ソビエト軍の大隊長、中隊長に

よる担当が決まった。)

初めて手にする大きな草刈鎌の操作は思ったより難しく、両手と腰の回転による要領は容易に修得出来ず、その上草いきれと、凹凸の谷地坊主の足元のためにノルマ達成は極めて困難であった。

入ソ初年度の冬は、慣れない労働や食糧不足に精神的要素も加わり、栄養失調や熱病による死亡者が連日続出した。

三年目より作業は一転して森林伐採となり、イマン西南の奥地キタイゴードルに移動した。伐採の作業も殆どの者が未経験であり、倒木の散在する原始林で、二抱え以上もの松の巨木を二人引きの鋸(ピラー)で息を切らしながら切る作業は、草刈作業にも増して過酷であった。ここでもノルマに追われて体力の消耗は甚だしく、その上作業による事故も加わり、多くの犠牲者を出した。

宿舎は、軍用天幕、既存の古い半地下式のいわゆるもぐら兵舎、足と頭とを交互にしないと寝られない狭い廃れた貨車などいろいろであった。また、時には野

営をしながら簡易ログハウス式の宿舎を自らの手で造ったこともあった。そのいずれも寝床は丸太を並べた上に藁と毛布一枚を敷いただけの粗末なもので、到底疲労を癒やすにはほど遠く、その上蚤、虱、南京虫などに絶えず悩まされていた。

抑留者の最大の関心事は、言うまでもなく帰国時期と食事であった。食糧は黒パンを主食として一応支給規程があったものの、種々の要因により実際には質量共に大きくかけ離れていて、絶えず空腹感にさいなまれていた。このため、山野草・茸類・木の実・野生の小動物など、あらゆる物で空腹と栄養とを補っていた。食事に関していまだに印象に残っていることは、手製の天秤で黒パンの分配をしていた時に、最後のサイコロ状の小さいかけらまでも、全員が食い入るような真剣な目つきで見守っていたことである。

入ッ当初は、作業効果を狙ったソ連側の要請により、旧軍隊組織のまま作業が行われた。暫くして階級章こそ外したものの、この組織は相当長く存続していた。しかし、昭和二十二年春頃より、現地発行の「日本新

聞」の配布や、派遣アクチブの共産化・民主化教育により、次第に民主化運動が強まった。やがて旧軍組織に代わって選挙による某上等兵を委員長とする新しい指導者組織が生まれた。このため私もそれまでの糧秣関係の責任や作業指揮の責任から解放され、内心安堵したものである。

共産化・民主化教育については、心底から共感した者は少なかつたと思われるが、民主化がダモイ（帰国）への必須条件との噂で、全員表面は心服を装っていた。抑留の実態を私なりに要約すれば、酷寒、過酷な労働、絶えざる飢餓感などに加え、強い望郷の念と帰国時期の不確実、更には栄養失調、熱病、作業事故などによる死亡者続出を目の当たりにして、生命に対する不安感と絶望感とに満ちた毎日の生活であったと言えるよう。

戦いに敗れて軍隊という組織を失い、異国の地で虜囚の身となった集団の姿は誠に哀れであった。自己保身のみに追われ、他を省みる余裕もなく、ひたすら食べることと寝ることのみに終始している姿は、極限に

おける人間の弱い赤裸々な面を表し、全く餓鬼道をおぼせるものであった。そこには学歴も教養も地位身分などは全く関係なく、それらは平常の社会生活でしか通用しないものであると痛感した。

平成九年七月十三日より五日間、全抑協のシベリア慰霊訪問団に参加し、「背広姿でのシベリア訪問」の永年の念願を漸く果たした。

私達第二班の訪問地は、ウスリースクとアルセニエフ周辺であり、私の希望地とは異なっていたが、いずこも私のいた作業地と環境が似ており、当時の生活を偲ぶのに十分であった。十カ所の墓地を慰霊訪問したが、既に石碑や墓標が建っていた所もあり、私達は新たに二カ所に、日本より持参した白木の墓標を建てて供養した。黙祷・弔辞・「異国の丘」の斉唱・読経と、全員はそれぞれに亡き戦友や肉親の冥福を涙ながらに祈った。

大切な私の青春を奪った三年間の抑留生活は、私に強い反ソ感情を抱かせたことは否めないが、反面、多くの貴重な教訓も与えられた。来年五月で私の帰還五

十年を迎える。今では怨讐を越えて、ロシア経済の立ち直りとロシア国民の幸福とを心より念じる心境に至っている。

抑留三年の記

岐阜県 可知 滋 男

昭和二十年八月十日現地応召、牡丹江兵事部に出頭、なぜか兵事部前で開拓団幹部に十二人ほど見捨てられる。十一日、星輝中学校庭で部隊編成、牡丹江特設警備隊豊浦部隊三浦大隊山本中隊に編入、十五日、牡丹江撤退、十八日、横道河子で停戦、二十三日に拉古まで戻る。官舎を鉄条網で囲って収容所建設、ここで千人単位の梯団編成あり、第五大隊（三浦大隊）。

九月八日、拉古を出発し、歩いて綏芬河^{マイフンガ}を越え、グロデコーヴォで車に乗せられ着いた所はスイソエフカの山の中、五六八労働大隊。薪伐採で越冬、ノルマは一人一・五立方メートルで三〇%ほど、成績如何で糧